

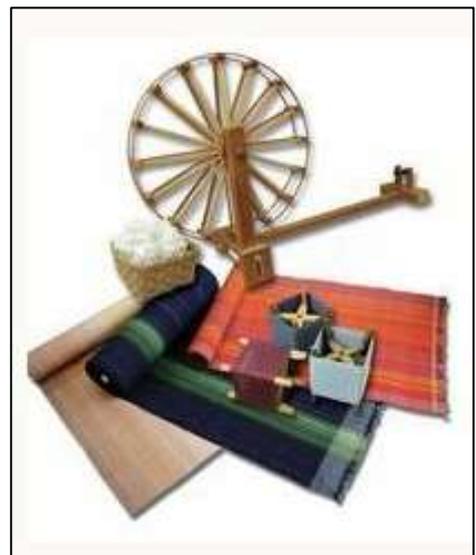


木綿会館の様子（土産物の販売も併設）

かつて「真岡」といえば、そのまま木綿の代名詞として通用した時期がありました。丈夫で質が良く、絹のような肌ざわりの真岡木綿は、“晒し”という加工技術にも優れ、絶大な人気を誇りました。

江戸時代の文化・文政・天保の頃（1804～1844年）には年間38万反を生産し、隆盛を極めました。その当時、江戸にあった木綿問屋はこそって真岡木綿を買い求め、江戸の木綿問屋の仕入高の約8割が真岡木綿であったという記録があります。つまり、江戸の人たちが着ていた木綿の10着のうち8着は真岡木綿だったということです。これだけ多くの人々が真岡木綿を着ていたならば、木綿のことを「真岡」と言っていたこともうなずけます。

しかし、明治時代になると、綿の糸が外国から大量に入ってきたこともあり、真岡木綿の生産は衰退してしまいました。そして、第2次世界大戦後（昭和20年以降）になるとその生産はほとんどなくなってしまいました。



糸車と完成した真岡木綿



そこで、昭和61年に真岡商工会議所が中心となって真岡木綿の「復興」を図りました。今では、機織り技術者が綿の栽培から染色～機織りまで、昔ながらの技術と伝統をしっかりと受け継いでいます。

機織りの様子